# 平成２９年度アクティブ・ラーニング推進事業　推進校実施報告

北九州市立筒井小学校

＜Ｈ２９年度研究テーマ＞

## つくりだすことに熱中する図画工作科学習

～図画工作科における、主体的・対話的で深い学びをめざして～

＜研究のねらい＞

図画工作科においての主体的・対話的で深い学びを生み出す授業のあり方を追究する。

１年ごとに、校内研究を行ってめざす授業像を明らかにした上で、全員研等で公開授業を行い、積極的に研究成果（課題）を発信する。

＜Ｈ２９年度の重点的な取組＞

以下の研究の着眼をもとに授業を通した研究に取組む。

着眼１　子どもの活動意欲を喚起する題材の設定

着眼２　子どもが造形的な見方・考え方を働かせる学習活動の工夫

着眼３　学習評価の工夫

＜平成２９年度の研究でめざす子ども像＞

○　表現や鑑賞の対象に対して、強い関心。意欲をもち、進んで関わろうとする子ども。

○　これまで身に付けてきた知識・技能をいかしたり、新たな知識・技能を獲得したりして、自らの手で課題解決をしていく子ども。

○　つくりたいもののイメージを膨らませたり、更新したりしながら自ら納得のいくものをつくりだそうとする子ども。

＜校内研究体制＞

- 校長 ― 教頭 ― 研究推進委員長（吉田）
  - 主題研究部
    - 理論研究会（全職員）
    - 実技研修会（全職員）
    - 環境整備　（全職員）
  - 学年部会
    - 低学年（中村・芳野）
    - 中学年（廣渡・村井・居蔵）
    - 高学年（東　・田中）
  - 事前教材研究会（全職員）

＜研究の成果の発信＞

・１年ごとに、校内研を行ってめざす授業像を明らかにした上で、全員研等で公開授業を行い、積極的に研究成果（課題）を発信する。

・学校便りや学校ホームページで研究によって生み出された子どもの姿を中心に発信する。

＜研究の経過＞

４月２０日（水）　昨年度までの３年間の研究の振り返り

５月１０日（水）　本年度の主題研究推進計画提案
６月２０日（火）　事前検討会（６／２８の授業に向けて）
６月２１日（水）　提案授業・学習指導案提案
６月２８日（水）　第２学年　主題研授業・研究協議会
７月２５日（火）　主題研修　題材選定
８月２５日（金）　指導案検討会
９月　６日（水）　全員研修会実施計画等の確認・授業準備
９月１３日（水）　授業準備（近接学年で協力）
９月２０日（水）　授業準備（板書・発問の検討）
９月２７日（水）　授業準備（場の検討）・全員研修会会場・運営計画
９月２８日（木）　全員研修会　会場設営　授業準備
**９月２９日（金）　全員研修会（第１学年　第４学年　第６学年　公開授業）**
１０月　４日（水）　実践授業の振り返り（福岡教育大学　笹原先生来校）
１０月１６日（月）　第３学年　主題研授業（学体訪問代表者授業を兼ねて）
１２月２２日（金）　各自の研究のまとめについて提案
２月　７日（水）　主題研究のまとめ（砂田指導主事来校）

**＜研究協議会（校内授業研）のもち方＞**

〔授業者〕
・検討会の初めに授業実践を通して、手立ての有効性について述べる。
・検討会の終わりに、検討会を通して、授業づくりについて、考えを新たにしたことを述べる。

〔参観者〕
・授業中は、子どもの姿をよく観察し、手立てが有効に働いているか吟味する。
・授業後に、子どもの姿から見た手立ての有効性についての考えを付箋に簡潔に書く。
・協議会の初めに、書いた付箋をホワイトボード等に貼る。（思考の視覚化）
・手立ての有効性について意見を述べ、全員で検討する。

**＜研究のまとめ＞**

研究の着眼にそって、授業実践を通して得た「主体的・対話的で深い学び」を生み出すポイントを付箋にに書いて、模造紙に貼り、話し合う。

## ◆研究の着眼

**【着眼１】子どもの活動意欲を喚起する題材設定の工夫**

○　主にアクティブ・ラーニングを生み出すことの前提となる方策
○　子どもが「おもしろそう」「やってみたい」と感じられる題材を吟味
　・遊び性・偶然性・模擬性・新規性・非日常性・意外性など
○　教科書題材、教科書題材のアレンジ、新たな題材の開発

**【着眼２】子どもが造形的な見方・考え方を働かせる学習活動の工夫**

○　アクティブ・ラーニングの視点「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」を生み出すことに主に関わる方策
○　「造形的な見方・考え方」とは「感性や想像力を働かせ、対象や事象を、形や色などの造形的視点で捉え、自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと」

＜**「主体的な学びの視点」**からの工夫例＞
・これまでの経験を生かす活動を取り入れる。
・自分の活動を確かめたり振り返ったりするような活動を取り入れる。
・自分の成長やよさ、可能性などに気付き、次の学習につながる活動を取り入れる。
　※　子どもが、主体的に題材の目標に沿った学習活動をするための工夫

＜**「対話的な学びの視点」**からの工夫例＞
・お互いの活動を見合いながら考えたことを伝え合ったり感じたことや思ったことを話したりするなどの言語活動を取り入れる。
・子ども同士だけでなく、保護者や地域、社会の人と交流する機会を取り入れる。
　※　他者や自分自身と対話しながら題材の目標に沿って見方や感じ方を広げられるようにする工夫

＜**「深い学びの視点」**からの工夫例＞
・表現及び鑑賞の資質・能力を明確にし、それらの資質・能力を相互に関連して働かせることができる活動を取り入れる。
・「つくり、つくりかえ、つくる」という学習展開を図る。
・教師が教える場面と友達と学び合う場面との関連を考えた学習展開を図る。
　※　子どもが、題材の目標に沿った自分の課題を見つけられるようにする工夫

**【着眼３】学習評価の工夫**

○　評価に関わる方策
○　子どもの資質・能力を伸ばすために子どもの学習状況を見取り評価をする工夫
＜学習評価の工夫例＞
・「一枚ポートフォリオ」をもとに、子どもが毎時間ごとに振り返りを行い、学習のめあてが達成できたかを自己評価する機会をもつ。教師は、その記述をもとに、次時に向けた個別の指導計画を立てる。

## ◆成果と課題

### 【着眼１】子どもの活動意欲を喚起する題材設定の工夫

| 学年 | ○　成果　★　課題 | キーワード |
|---|---|---|
| １年 | ○　９色の透明おりがみを、白いテーブルや白い壁、ホワイトシートを敷いた廊下や階段、窓等に自由に並べたり、重ねたり、つないだりする活動を題材として設定したことは、子ども自らが、場所を選んだり、色の美しさに気付いたりしながら、活動を広げていく楽しさを味わえた点から、子どもの活動意欲を喚起する題材として有効であった。透明おりがみが、静電気で、容易に壁や窓に貼り付く特性や、透過性などの材料の特性と、日常自分達が使っている場所を１年生の子ども達の手で非日常的な場所に変化させることができたことが、児童の五感を大いに刺激できたと思われる。<br> <br> <br>○　活動場所を白いテーブルの上から、ホワイトシートを敷いた廊下や階段、窓や壁へと順に広げたことで、教室以外の広い場所でも抵抗なく活動ができた。普段、１時間目にはアイデアが浮かばずに、活動が進みにくい児童も、自分から好きな色の透明おりがみを取りに行き、活動できた。<br>★　資料１は、A児の振り返りカードである。第１時において、ひとりだけ、「楽しかった」と書いた児童である。第２時目には、「とても楽しかった」に変化している。しかし、「どんどん並べる」や「並べ方を見付ける」という質問に対しては、逆に「まあできた」に変わっている。このことから、材料の特質や、場所の工夫以外にも、児童の意欲を喚起する手立てが必要であったと思われる。 | 透明おりがみ<br>材料の特性<br>非日常<br>五感<br><br>活動場所の広がり<br><br>意欲喚起の別の手立て |
| ２年 | ○　卵を隠しておくことで、子どもたちがわくわくしながら題材に取り組むことができた。児童は、卵型の土粘土を見たり、触ったり、持ったりすることで、見通しをもつことにつながり、作品を工夫して作っていた。卵から生まれたという話と「グアナコ」という名前から、想像を膨らませて意欲的に取り組んでいた。<br> | （粘土）<br>卵<br>「グアナコ」<br>わくわく<br>想像 |

| | | |
|---|---|---|
| | ○　第１時では、手のみで大体の形を作っていったが、第２時になり、ヘラを紹介した。手だけで形を作ることが難しい児童がヘラを使うことで、穴をあけたり、切り込んだりしやすくなり、作品の発想や構想に広がりが出た。<br>★　同じ班で作っている子供たちの作品が、似ていた。個々の発想を広げるための手立てが必要だった。 | |
| ３年 | ○　独特の手触りや弾性や可塑性などがあり、児童の感覚を刺激する魅力的な素材である綿を主材料にしたことや、これまで経験したことのない綿にふんわりと色が定着していくよさや柔らかい色合いの美しさを感じることは、これを材料として表そうとする関心や意欲を高め、これをもとにして、立体的に表したり、何かに貼り付けたりして思いついたものをつくってみたいという思いを継続してもつことができたと考える。また、この題材の有効性として、あまり使ったことが無い材料を使う「新規性」、いくらでもやり直しができる「可変性」など、子どもの関心を強くひきつける要素があったと考える。<br> <br>★　綿の特性を味わうこと、ふんわりと定着していく色の美しさに気づかせること、そのどちらも重要であると考え活動時間の配分を行った。しかし、３年生という発達段階を踏まえて、綿としっかりあそぶ活動時間をより多くとるべきであった。そうすれば、より綿の特性を生かした発想や構想に向かう思いをもつことができたと考える。 | 綿<br>弾性<br>可塑性<br>感覚を刺激<br>素材<br>新規性<br>可変性<br><br>遊ぶ時間<br>（材料体験） |
| ４　年<br>① | ○　特有のしなやかさと丈夫さをもった紙バンドを主材料としたことや、それを輪にして組み合わせることをもとにして「新種の生物」を立体的につくりだす題材を設定したことは、子どもの発想や構想の能力を引き出しつつ、活動意欲を喚起し続けることができた。この題材の有効性として、あまり使ったことが無い材料を使う「新規性」、丈夫でいくらでもやり直しができる「可変性」、輪にした形を組み合わせることで多様な立体的な形が現れる「偶然性」、現れた形が○○に見えてくる「模擬性」など、子どもの関心を強くひきつける要素があったと考える。<br> <br>★　第３時においては、「あまり楽しくなかった」と記述をした子どもが２名いた。その思いの背景には、発想・構想面でのつまずきと創造的な技能の面でのつまずきがあった。最終的には、この２名の子どもは、教師の支援を介し自分の納得のいくものをつくりあげることができたが、題材の有効性に頼ることなく、個別の支援をしっかりと行う必要性を実感した。 | 紙バンド<br>新規性<br>可変性<br>偶然性<br>模擬性<br><br>個別の支援 |

<table>
<tr>
<td>４　年<br>②</td>
<td>○　独特の手触りの心地よさがあり、簡単な操作で形をいくらでも変えられる土粘土を主材料としたことで、何度でもやり直しができるという安心感から活動意欲を持続させることができた。<br>○　動物が踊っているように見える動画を鑑賞したり音楽に合わせて実際に踊ったりしたことで「リズムにのる」というキーワードは体をひねる、手足を曲げ伸ばしするなど自由な発想を広げ、動きのある形を表そうとする思いを生み出し、子どもたちの発想や構想の能力を引き出しつつ活動意欲を喚起し続けることができた。<br> <br>★　子どもたちは、意欲的に制作に取り組み楽しく活動することができたが、創造的な技能の面でつまずきがあり、制作途中で思うように表現できず活動が止まってしまう子どもが数名いた。教師が基本的な制作の技能の図を示すなどの支援をすることで自分が納得いく作品を完成させることができた。構想段階で個別の支援をしっかりしておけば、子どもたちはより自分の力で作品づくりに取り組めたと考える。</td>
<td>土粘土<br>独特の手触り<br>やり直しができる<br>動画鑑賞<br>動作化<br><br>個別の支援</td>
</tr>
<tr>
<td>６年</td>
<td>○　色や柄の違う布と、大・中・小に分けた枝を主材料としたことや、針金やビニタイ、モールを使って組み合わせながら立体物をつくり出す題材を設定したことは、子どもの発想や構想の能力を引き出しつつ、活動意欲を喚起し続けることができた。この題材の有効性として、何度でもやり直しができること。布や枝の特徴を生かして組み合わせながら多様な立体的な形が表れることなど、子どもの興味・関心を強く引きつける要素があったと考える。<br> <br>★　本時においては、「あまり満足できなかった」という子どもが２名いた。その背景には、枝と枝とを組み合わせて立体にする難しさや、発想・構想面でのつまずきがあったと考えられる。最終的には、何とか作品をつくることができたが、個別の支援をしっかりと行う必要性を感じた。</td>
<td>布（色・柄）<br>枝（大きさ）<br>針金　ビニタイ<br>やり直し<br>多様な立体的な形<br>表れる<br><br>個別の支援</td>
</tr>
</table>

## 【着眼２】子どもが造形的な見方・考え方を働かせる学習活動の工夫

| 学年 | ○　成果　★　課題 | キーワード |
|---|---|---|
| １年 | ○　材料コーナーを２階と１階の箇所に設けたり、階段や廊下の真ん中にホワイトシートを敷き、一方通行で移動しながら活動できるようにしたことは、子ども達が主体的に表現と鑑賞を交互に繰り返しながら活動したり、友達とつながって活動する楽しさを味わったりするのに大変有効であった。また、この題材は、自分たちの生活の場で行われたことで、学習のあとも、子ども達の生活に根付き、今後の造形遊びへの期待を持たせるものとなった。<br>★　並べる、つなげるといった活動の特性から、一つのリズムのある動きがうまれると、その並べ方が繰り返される傾向に向きやすい。そのため、第２時目には、１時目に見付けて活動が繰り返す子どもが多かった。第２時目にさらに、子ども達をわくわくとさせるような教師からの投げかけが必要だったと思う。 | 材料コーナー<br>生活への根付き<br>今後への期待<br><br>教師からの投げかけ<br>（新しい視点） |
| ２年 | ○　個別に声かけをして話を聞きほめることで、細かいところまでより深く工夫して作っていた。友達が自分の作品について話しているのを聞き、イメージが広がらなかった児童も、友達の話を参考に、自分の作品に取り組むことができた。<br>★　どんな作品を作るか考えがまとまらない児童がおり、作っては壊すを繰り返していた。声かけや聞き取りをしたが、作りたいものが最後まで見つからず、完成せずに終わってしまった。今後も同じような活動を行い、児童の経験を増やして慣れさせる必要があると感じた。 | ほめる<br>話を聞く<br><br>経験を増やす |
| ３年 | ○　グループ活動の座席配置にしたことで、自然と会話が生まれたりアドバイスする姿が見られたりと、対話しながら学ぶ姿が多く見られた。<br>○　今後の活動への見通しをもつための名前カードを貼り、自分の思いを表す場面では、全体計画を示しながら、現在地点の確認と「考え中」の札を示し、全員の児童が無理なく自分の思いを表せるようにしていたので、全員がすぐに名前カードを貼ることができていた。授業の中で発表することができにくい児童にとっても、視覚的に自分の思いを示せることは、次時への見通しをもつだけでなく、意欲の持続にもつながったようだ。また、単元の全体計画や１時間の学習の流れを黒板に示すことで、児童が見通しやゴールイメージを持つことができていた。<br> <br>★　具体的なイメージがある児童の発表の機会をもったが、席によっては友達の作品が見にくい所もあったので、導入の際のように全員集めて行うべきだった。また、全員ではなく、グループごとに一人ずつ話をさせることも次時の活動への見通しを持つためには、効果的であったのではないかと考える。まだ思いがさだまっていない児童にとっても、目の前の作品を見せながら、今日の活動について話すことで自分のしたいことが言葉になって出てくることも考えられる。 | グループ活動の座席<br>自然な対話<br>活動への見通し<br>名前カード<br>学習の流れ<br>ゴールイメージ<br><br>発表の場<br><br>グループごとの発表 |

| | | |
|---|---|---|
| 4　年<br>① | ○　紙バンドを輪にしてそれを組み合わせる試行的活動を取り入れたことは、子どもにとって、自分の造形的な見方・考え方を存分に働かせながら発想・構想を広げたり深めたりするよい機会となり、子どもは、納得がいくまでつくり、つくりかえ、つくる活動を行っていた。また、教師が実演をしたりモデルを提示したりしたことは、子どもに新たな形づくりの展開の見通しやひらめきを与え、子どもの造形的な見方・考え方を深めるものとなった。単なる形づくりで終わらず、自分の造形表現をよりよいもの、より納得のいくものにしていこうとする主体的で深い学びを支えるものとなった。<br>★ コの字型の座席は、子どもが友達の表し方のよさを見つけたり、気付いたことを伝え合ったりするなどして、対話をしながら製作をすることができることに若干機能はしたが、対面の友達の作業の様子は、距離が遠くてやや見にくく、あまり効果的ではなかったといえる。向き合って互いの活動の様子を見合い、対話することができる小集団グループをつくるなどの配置が望ましいと考える。 | 試行的活動<br>納得<br>つくりつくりかえつくる<br>教師の実演<br>モデル提示<br>ひらめき<br>座席配置 |
| 4　年<br>② | ○　針金や割りばしを芯材として入れたことで子どもにとって自分が思った通りの表現を実現することができ、自分の発想や構想を広げたり深めたりするよい機会となった。そして、納得がいくまで制作し、つくりかえるといった活動を繰り返していた。子どものふり返りのなかで「針金をいれて作品がすごくなった。恐竜の手と首に針金をいれてぐねぐねさせることができた。すごく変わった。」「針金で、手がまげれた。何度もつくれていい作品ができて楽しかった。」といった感想を述べ、自分の作品に満足している子どもの姿が多く見れた。また、教師が実演したりモデルを提示したことは、子どもに新たな制作の見通しやひらめきを与え、子どもの造形的な見方・考え方を深めるものとなった。自分の表現をよりよいもの、より納得いくものにしていこうとする主体的で深い学びを支えるものとなった。<br> <br>★　芯材となる針金の太さの種類が不足していて、粘土の重さに耐えられないため、思い通りの作品づくりができない子どもがいた。針金を巻き付けて芯材の強度を増すことで対応したが、芯材を工夫することに時間を費やし粘土で形をつくるという活動の時間が短くなってしまった。事前に子どもがつくりたがるであろう作品の大きさや形をより多く想定し、針金などの材料の準備をしておくことが必要であると考える。 | 芯材<br>思った通り<br>つくりかえる<br>納得<br>教師の実演<br>モデル提示<br>ひらめき<br>子どもの活動の想定<br>準備 |
| 6年 | ○　教師のモデル作品二つを提示し、鑑賞する活動を取り入れたことは、子どもにとって自分の造形的な見方や考え方を働かせながら発想・構想を広げたり深めたりする機会となった。また、グループ学習や材料スペースの工夫によって、自然的な会話や共同が生まれ、対話的な学びへとつながった。<br>★　ミニ鑑賞会を設定し、作品のよさや美しさを味わったり、自分の作品を振り返ったりできるようにしたが、手元に作品がない状態での紹介であった為、あまり効果的ではなかったといえる。作品を手元に置いて、自分の思いをしっかり伝える為には、生活班の中での交流を設定することが望ましかったと考える。 | 二つのモデル提示<br>グループ学習の工夫<br>材料スペースの工夫<br>班の中での交流 |

## 【着眼３】学習評価の工夫

| 学年 | ○　成果　★　課題 | キーワード |
|---|---|---|
| １年 | ○　写真で子ども達の活動の様子を追ったことは、教師ひとりでは見とれない個々の子どもの思いや、活動の変化を捉えることができた。第２時めの導入で、撮った写真をスライドショーで子ども達に見せることで、自分の活動や友達のアイデアの楽しさに気付いたり、２時目の活動の見通しをもつこともできた。<br>○　写真と合わせて、短時間で記入できる振り返りカードも活用したことで、個々の子ども達の活動への思いや、困り感を教師が見つけることもできた。<br>★　評価の方法が写真と、振り返りカードになるため、活動の途中での評価が難しかった。活動の流れを止めないように、活動の終盤で一度、全体で話し合う時間を設けたが、活動場所が見渡せる場所ではなかったため、各々の振り返りにつながるような時間を持つことができなかった。 | 写真<br>スライドショー<br>振り返りカード<br>活動場所 |
| ３年 | ○ ふりかえりシートを作成し、活用したことは、子どもが自分の学びを振り返って、自分の活動に対して価値付けをしたり、次時への見通しを持ったりする主体的な学びを支えるものとなった。また、教師にとっても、個々の子どもの内面、またその変容を一目でとらえることができ、次時での個別の支援策を考える手がかりとなって機能した。また、短時間で書けるので、児童の負担にならない点もよかった。 | ふりかえりシート<br>内面や変容のとらえ<br>個別の支援策 |
| ４　年<br>① | ○　１枚ポートフォリオ型のふりかえりシートを作成し、活用したことは、子どもが自分の学びを振り返って、自分の活動に対して価値付けをしたり、次時への見通しを持ったりする主体的な学びを支えるものとなった。また、教師にとっても、個々の子どもの内面、またその変容を一目でとらえることができ、次時での個別の支援策を考える手がかりとなって機能した。 | １枚ポートフォリオ<br>内面や変容のとらえ |
| ４　年<br>② | ○　一枚ポートフォリオ型のワークシートを作成し活用したことは、子どもが自分の学びを振り返り次時への見通しをもったりする主体的な学びを支えるものとなった。また、教師にとっても個々の子どもの内面、その変容を一目で捉えることができ次時での個別の支援を考える手掛かりとなり、有効であった。 | １枚ポートフォリオ<br>内面や変容のとらえ |
| ６年 | ○　自己評価する「振り返りワークシート」を活用したことは、自分の活動に対して価値付けたり、次時への見通しをもったりする主体的な学びを支えるものとなった。また、教師にとっても、個々の変容や困り感を確認することができ、次時への個別の支援策を考える手がかりとなった。 | 振り返りワークシート |